

# 小 菅 探 訪

～塀の町の歴史の残影～



平成 24 年 3 月 1 日

かつしか P P クラブ

# 小 菅 探 訪

～塀の町の歴史の残影～

- I. 東京拘置所 . . . . . 3
- II. 関東郡代屋敷跡 . . . . . 4
- III. 小菅（千住）御殿 . . . . . 5
- IV. 小菅銭座跡 . . . . . 6
- V. 明治維新と小菅縣 . . . . . 7
- VI. 名縣知事 川瀬秀治 . . . . . 8
- VII. わが国初の煉瓦工場 . . . . . 9
- VIII. こすげろの . . . . . 10

～表紙の写真～

荒川から見た小菅の東京拘置所である。一般人には無縁な場所であり、屋上にヘリポートを備え近代的な要塞のように見える。

対岸の荒川河川敷では若者たちが、フットボールのフォーメーション練っていた。冬の日午後の陽射しに足許の影が長い。

巻末の写真は拘置所正門脇の親水公園。頭上を高速道路中央環状線が走る。

撮影年月日 平成24年1月13日  
文と写真 小池和榮

人の周りを口で囲むと、囚（とら）えるとなる。

檻に容れ自由を奪う形は象形文字としても頷ける。

葛飾区の西端に位置し、荒川と綾瀬川に挟まれた「小菅」は、堀のある町として全国に知られる。

今は東京郊外の静かな町である。しかし、それだけではない。

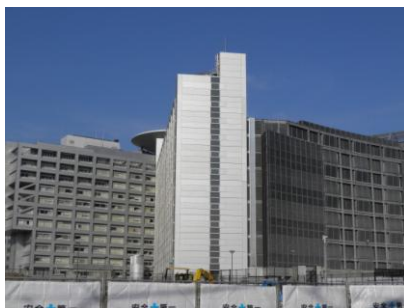
川沿いのその一郭は、かつて時の流れの中で輝き、人々は己が人生を紡いだ歴史の町である。

## I. 東京拘置所

東京拘置所は法務省矯正局に属し、通称「東拘」とか所在地から「小菅」と呼ばれる。敷地は約 222,000 m<sup>2</sup> (66,000 坪) と、全国 8 拘置所（東京・立川・名古屋・京都・大阪・神戸・広島・福岡）の中でも、収容定員 3000 人は最大規模である。



(明治の面影を残す正門)



(工事が続く高層舎監)

その歴史は古く、明治 11 年 (1878) に遡る。前年に勃発した西南戦争の捕虜を収容する為、明治政府は煉瓦製造所を買収し、監獄を建設した。それから 134 年、小菅監獄→東京収治監→小菅刑務所と呼び方は変わった。

そして昭和 45 年 (1975) に、巣鴨の東京拘置所（現サンシャイン 60 の敷地）が廃止されてから、東京拘置所となった。

かつての宰相や、大物政治家、オウム事件の首謀者、新聞を賑わした刑事被告人、死刑確定者が収監され、最近では大手製紙会社の御曹司も、一時期この住人となった。

ダメ元で取材を申し入れてみた。電話のガイダンスに従い、操作を繰り返しやっと出た窓口は、ホームページに載っている事が全てだと素っ気ない。東京拘置所の改修工事は平成 18 年に始まり、今なお真最中である。ヘリポートを備えた高層舎監、その奥に 14 階建職員住宅が並ぶ。カメラを向けると門衛が飛んで来て制した。

往時の赤煉瓦塀はほとんど壊され、正門脇に僅か面影を残すのみである。近くで「差入れ品」を販売する商店主は「同業は 2 店あるが、施設内に法務省の外郭団体が運営する店があり歯が立たない。行政仕分けの対象だった筈が、いつの間にかうやむやになってしまった」とこぼした。

地元の不動産業者は「刑務所だった頃は、腕に技術を持つ受刑者が作った製品を格安で販売した。車検整備も安くやり、地元では好評だった。ただ、出す時は車内の灰皿に「吸殻」が残っていないか厳しくチェックされた」と、当時を振り返り語った。

## II. 関東軍代屋敷跡

江戸時代の葛飾・葛西一帯は、一部の寺社や旗本の領地を除き幕府の直轄地（天領）であった。幕府はその管理にあたり「代官」を置いた。その郡代代官屋敷が今の「東京拘置所」の場所である。

水戸黄門でも代官は悪の権化のように扱われるが、事実、権力を笠に着た者が多かったようである。



徳川家康の功臣本多忠勝は、「代官と徳利の首に縄は付き物」と言ったとか。

関東郡代は家康の入府以来、功績のあった伊奈氏が代々あたった。

伊奈氏は、歴代、質実で地味な人柄から将軍の信頼が厚く、殊に農政、利水土木に優れ、その手法は「伊奈流」と称せられた。

(代官屋敷跡・後方は塀内の官舎)

慶長年間に今の、金町、松戸、小岩、市川、栗橋、に在った関所管理の功により、3代将軍家光から西葛西郡小菅村に約10万坪の土地を拝領した。伊奈氏はこの地を開墾し、陣屋を設け、将軍の鷹狩りの「御膳所」に供したというからそつがない。

順風満帆の伊奈家であったが、寛政4年(1792)に、12代忠尊が家事不行き届き罪で職を解かれ、領地と下屋敷は没収され家は断絶した。しかし、翌年、幕府は伊奈家の先祖伝来の功績を惜しみ、再興を許した。

### Ⅲ. 小菅(千住)御殿

小菅御殿と言っても東京拘置所の揶揄ではない。小菅に在った別邸である。8代将軍徳川吉宗は、元文元年(1736)、伊奈氏の屋敷内に御殿の造営を命じ、葛西方面の鷹狩り止泊所とした。

紀州藩に生まれた吉宗は、身長が6尺(180cm)、体重24貫(90kg)の美丈夫で狩猟を好んだ。5代将軍の「生類憐みの令」以来、禁止されていた鷹狩りを復活し、元禄以来の遊惰を改め、士気の高揚を図った。小菅御殿の造営は、病弱なわが子家重(9代将軍)を「鷹狩り」で鍛える目的もあった。

しかし、実際には将軍が小菅御殿に出向く時は、豪華な遊覧船「小菅丸」で隅田川を上ったという。



(塀の中にある御殿屋敷跡の碑)

当時の葛飾、葛西地域は野鳥類も多く、今も「白鳥」の地名が残る。農民は鶴を飼育させられ、水田は荒らされ、案山子まで禁止したというから迷惑な話である。

寛保元年（1741）失火で全焼したが、まもなく再建され、一般には「小菅御殿」または「千住御殿」と呼ばれた。

#### IV. 小菅銭座跡

今でも都内には「金座」「銀座」の地名があるが、かつて小菅には「銭座」が在った。安政 6 年（1859）、幕府は小菅に鉄銭座を設けた。場所は、今の西小菅小学校のあたりだという。



(西小菅小学校正門)



(正門脇の銭座跡)

ケチを「びた一文出さない」などと言うが、「びた」とは「鏹」と書き、鉄製の一文銭（寛永通宝）のことである。

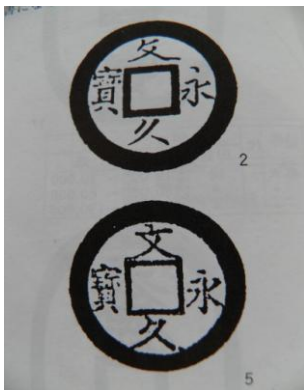
小菅で铸造されたことから「小菅銭」とも呼ばれ、幕末の逼迫財政をカバーする役を担った。

小菅銭は 1 枚造るのに 1.5 文掛ったので別名「出血銭」と呼ばれた。やがて格差がつき、幕府は「銅銭」1 貫（1,000 文）に対し「鉄銭」1 貫 500 文を同等とせざるを得なかったという。

文久 3 年（1863）の铸造高は 70 万 7,250 貫に達し、江戸の両替商を通じて京都・大阪方面に廻送され広く出回った。

前年の文久 2 年、幕府は銭座に先例のない鉄製の 4 文銭の大量生産を命じた。一般に「文久永宝」と呼ばれるもので、民間の評判はあまり良くなかった。しかし、近年になって希少価値を以って好事家の間で人気が高い。ここまで書くと、小菅の銭座は「鏹銭」の生産拠点のように思われるがそうでもない。

幕府は密かに金・銀の分銅（インゴット）を鑄らせたとの噂がある。ペリーの来航以来世の中は騒然とし、加えて文久大地震の発生など、いつ江戸に暴動が起きかねない世相であった。当時の勘定奉行は、切れ者として知られ、いまだ埋蔵金伝説が付きまとう小栗上野介である。



万一に備え、江戸市街から離れた小菅で金・銀の分銅を鑄造し、舟での移送を想定しても不思議ではない。

後年、小菅の銭座の跡から大量の金・銀片が発見されたというが、遠い（日本の貨幣カタログより）歴史のロマンである。

## V. 明治維新と小菅縣

明治元年（1868）、江戸は東京と改まり、幕府の旧代官支配地は武蔵野縣となった。3名の知縣事と呼ばれる新政府の役人が、エリアを分け治めた。翌明治2年、小菅縣、大宮縣、葛飾縣、品川縣、が新しく設けられた。

「維新」の響きは美しいが革命であり、旧弊の一新である。

にわかに政權を握った新政府の不慣れと混乱は、今の民主党の比ではなかったものと推測される。

現在の葛飾区全域は、小菅縣に組み込まれた。

小菅縣の行政管轄は、都内の足立区、荒川区、北区、板橋区、豊島区の一部も含み、埼玉県の北葛飾郡や、蒲生、越谷、千葉県の東葛飾郡及び、市川、行徳までも含んだ。

これを更に15ブロックに分け所管町村は、355に及ぶ広大なものであった。何故、小菅縣が誕生したかは、関東郡代の代官所があったから、など諸説はあるが定かではない。

## VI. 名縣知事 川瀬秀治

明治2年、小菅縣知事に任命されたのは、弱冠31歳の川瀬秀治であった。江戸が東京になったとはいえ、進駐軍の行政官として、徳川家恩顧の地で、司法・行政・軍事、の全権を担った。

川瀬は天保10年(1839)に、京都宮津藩士の子として生まれ、幼少より文武に優れ、宝蔵院流の槍の達人であったという。

明治元年、河瀬氏は新政府の公儀人(公務員)として京都に出仕し、天皇の遷座に従い東京に移った。同年、太政官の弁事(総務書記官)に任ぜられた。知事として赴任するや直ちに小菅縣報恩法を立案、「法恩社」を結成した。この制度は有志による基金で、縣民が不慮の天災や疾病に際し、無利息で金品を貸与するものであった。

民生事業の魁(さきがけ)ともいうべき制度を民部省は賞讃し、全国に勸奨通達を行なった。その後、欧米を真似た民間の保険相互会社が多く設立されたが、官制の報恩社に刺激されたものと思われる。また、教育面でも東京府より1年早く「小菅縣立仮学校」を開き、縣庁の役人や近隣の希望者を学ばせた。



(河瀬秀治が眠る目黒の祐天寺)

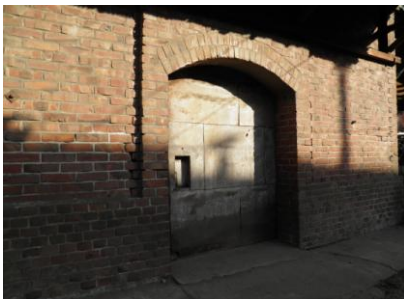
在任は2年足らずであったが、その後、印旛、群馬、熊谷の各縣知事を歴任し、岐阜の長谷部、葦山の柏木とともに日本三名縣令(知事)と呼ばれた。その後、内務、大蔵、農商務省で累進し明治15年、(1882)実業界に転身、横浜正金銀行(現横浜銀行)取締役、富士製紙(株)社長として活躍した。昭和3年(1928)90歳でその生涯を閉じた。



## Ⅶ. わが国初の煉瓦工場

文明開化の訪れは、横浜、新橋、銀座などの洋風建築や道路に、膨大な量の煉瓦が使用されることになった。

明治 5 年 (1872)、小菅にわが国最初の洋式煉瓦製造所が建設された。原料の「荒木田土」は三河島の荒木田ヶ原に由来し、荒川や利根川水系の土が適した。



(小菅で製造された煉瓦)

(煉瓦を使った小菅の旧家の蔵)

当時、わが国の煉瓦製造技術は未熟で建築用には適さず、指導する外国人技師の不満が強かった。彼らは外務省にまで強く申入れし、苦慮した政府は中国の上海からの輸入を真剣に考えた。

そんな折、平松栄次郎が英国人技師ウオートルを招聘し、小菅の関東郡代屋敷跡約 4000 坪 (13,220 m<sup>2</sup>) を利用して煉瓦製造を始めた。しかし、製品は思わしくなく明治 6 年、工場は実業家川崎八右衛門の手に渡った。川崎はウオートルの協力を得て、ホフマン式の「輪窯」を築き、一度に 24 万個の大量生産を実現した。

明治 11 年 (1878)、小菅煉瓦製造所は再び経営困難に陥り、警視庁監獄局が買収し官営となった。収治監は囚人に煉瓦を焼かせ、囚人の中で優秀な者を全国の刑務所に送り、技術指導にあたった。

小菅産の煉瓦は、表面に直径約 2 cm の「桜」の刻印が打たれていた。上の写真\*の部分であるが、拓本でないと鮮明に見えない。桜は看守の胸ボタンのデザインを用いたという。

明治 19 年（1886）の月間生産量は 115 万個に達し、明治 38 年（1905）に再び民間業者組合の手に移り、関東大震災で窯が崩壊するまで製造が続けられた。

## VIII. こすげろの……

かつて小菅は、徳川幕府お膝元の天領管理で重要な役割を担った。立地的には奥州・水戸・佐倉街道のボトルネック機能を有し、一方で幕藩財政を支える通貨の鑄造など、歴史の舞台で光彩を放った。田畑を耕し生涯を終えた者、職人として黙々と銭を鑄た者、武士としてその職責を果した者など、人々は身分の掟に従い懸命に生き、家族を養った姿が思い浮かぶ。

万葉集巻 14 の東歌 [3 5 6 4] に

古須氣呂乃　　（こすげろの）  
宇良布久可是能　（うらふくかぜの）  
安騰須酒香　　（あどすすか）  
可奈之家兒呂乎　（かなしけこらを）  
於毛比須吾左牟　（おもいすごさむ）

の歌がある。武蔵と下総の合い葛飾郡に小菅あり」とある。「こすげろ」とは「小菅」を指し、古くは海がこの辺りまで来ていて、これを詠んだ歌だという。

澤瀉久孝の万葉集注釋によると

～小菅の浦を吹く風のように何をしても  
愛しい子らを思い忘れることができない～

の意味である。当時、東国の壮夫は防人として九州に遣わされ、その悲しみを詠んだ歌である。歌を今に置き換えると、拘置所に収監され、悶々と我が子を思う気持に通じるものがあり、物悲しい響きすら覚える。

